

マイは中学・高校の六年間、第三者の紹介という形で援助交際に近い売春を行ってきた。

<データ6>

筆者：援助交際のエッチは気持ちいい？

マイ：うん、私は根っからのスケベやから。

筆者：お金がもらえて、エッチできて最高っていう感じ？

マイ：もう、趣味と実益を兼ねたなんて楽しい仕事やと、私は思っていたけど。

(1998.10.1 収録)

マイのようなケースには、欠落系に見られるような内面における不安定さの兆候も見ることではないし、後に見るバイト系とも違って、金銭を得ることと性的行為の両方を楽しんでいる。

また取材時に高校中退し家出状態であった18歳のマユミも、この類型に当てはまると思われる。

<データ7>

筆者：援助交際すること自体は好き？

マユミ：好き。

筆者：楽しい？

マユミ：楽しいですね。

筆者：何が楽しんやろう？

マユミ：やっぱエッチできること。

(1998.8.21 収録)

今までの援助交際男性の数が「へたすりゃ、千人」に達しているかもしれないと笑いながら話すマユミは、ここで「エッチ」と呼ばれている性行為には積極的である。

3-3 バイト系

<データ8>

筆者：援助交際やっている時って、楽しい？

ユカリ：お金もらう時だけ楽しい。

(1998.8.2 収録)

効率追求型であるバイト系とは、ユカリという

16歳の高校生のインタビューにあるように、援助交際を短時間高収入型のアルバイト、あるいはビジネスとしてのみ把握している援助交際女性をさす類型のことである。当事者である女性が援助交際に対してお金以外の何物を得ることがないと主観的に、判断しているケースである。ユカリの場合、援助交際はバイトとして完全に割り切っていると断言している。ここで言うバイト系に属する女性は、私の取材においては39人中12人、約三割いる。バイト系の女性は性的行為に対して消極的、あるいは無関心である。中には「マクロ状態」であると話す女性も多い。性的行為に対して消極的な理由は、この類型の女性が性的行為に対して快感を覚えないという不感症という理由によるのではなく、「好き」という感情に結びつけられた特定の相手との性的行為と援助交際による性的行為との線引きする必要があるという理由のためであると考えられる。愛と性的行為の一致を理想とすることを学習してきた女性にとっては、お金と結びついた性的行為において積極的に振る舞うことは、彼女たちの性的アイデンティティに混乱をもたらすと考えられるからである。

この類型の抽出にあたっては慎重を期さねばならない。というのも、インタビューの当初は援助交際の動機に関してまず「お金」という答えが返ってくる。しかしインタビューが進むにつれて、別の動機が登場してくるのがしばしば見受けられる³⁾。この類型の問題点は、「援助交際の目的はお金である」という動機付けに対して、帰結として援助交際女性を得るモノはただ単に金銭だけではないという点である。いくらアルバイトとして援助交際における性的な交渉を割り切ったところで、例えば相手の男性のプロフィールや相手の男性が売る側の女性である自分をどう見ていたかといった情報は残ってしまう。そのことによって、彼女たちの援助交際観や男性観、社会観は確実に変化する。

さらに「(お金を身体を売ることが) 割り切れる」と言い切ったところで、そのことを彼女たちが隠したがること自体、「お金では割り切れている」が「性的には割り切れていない」という側面

3) インタビュー時にしばしば登場する援助交際の動機としてあげられる「お金」という語については、動機の語彙という視点から論じている。圓田 [1998] を参照のこと。